

卷八

徳川家康

続うず潮の巻・燃える土の巻



山岡莊八 講談社



徳川家康 第四卷 続うず潮の巻

燃える土の巻 昭和四十年六月十

五日第八刷発行 著者 山岡莊八

発行者 野間省一 印刷所 凸版

印刷株式会社 製本所 株式会社

大進堂 発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽町三ノ一九 振

替 東京三九三〇 電話 東京

(九四二) 一一一一(大代表)

© 山岡莊八 一九六三 定価 六百二十円

徳川家康

4

続うず潮の巻
燃える土の巻

目次

続うず潮の巻

謀略の中

七

運命星座

三〇

悲劇の麦

五一

女の戦い

六二

暗雲動く

七四

油 蟬

八五

嵐気のみだれ

九六

業火	二〇四
二男誕生	一九二
秋空	一八一
二つの策謀	一七〇
火柱	一四九
女刺客	一三四
燃える土の巻	
破滅	一二八
叛心	一〇七

運命の使者

二二〇

落花の匂い

二三一

秀吉の場合

二四二

地の嘆き

二六一

声なき声

二七六

双つの鏡

二九〇

破れ雨

三二〇

胆のありか

三二五

彌四郎の計算

三四〇

小心小義

三五二

露見

三六三

妻の立場

三七八

裁く者

三八八

付録（参考地図及び諸家系譜）

装幀 稲垣行一郎
挿画 木下二介

箱裂地 麻地草花人家文様茶屋染

提供 山口勉

表紙金版 徳川家康直筆署名

徳川家康

4

燃える土の巻
続うず潮の巻

続うず潮の巻

謀略の中

一

岡崎城も浜松城におとらぬきびしい戦備のうちに春を迎えた。

おなじ三河のうちでも山家三方はすでに武田方へまわっていたし、新年早々、信玄は野田城へむけて兵をうごかしている。

十五歳になった三郎信康は元旦の未明に諸將を集めて、「もし父上の命あらば、われらも野田城へおし出して武田の主力と一戦する。みなもそのつもりでいるように」

きびしく言い渡して初日の出は馬場で迎えた。それもわざと軍装を避けた平服姿だった。

肌を裂く寒風の中できりりと眉をあげて馬を責める姿は、傍を離れぬ平岩親吉の眼にかつての家康以上に凛々しく見えた。

裸木の桜馬場を縦横に乗りまわし、平首の汗を見とどけてから馬をおりと、

「父上が、おれを三方ヶ原に連れていたら、むぎむぎ負けはせなんだになあ親吉」

昂然として、こんどは的場へ歩くのだった。親吉はだまってそれに従った。

木曾谷から吹きわたる朝風が地面いっぱい霜柱を立て、若い大将の足もとで鳴った。

「親吉、そちの思うままに申してみよ。父上は戦が下手なのではあるまいかの」

「もつての他でござりまする」

「というと、上手の手から水が洩れたと申すのか」

「そのようなご解釈ではなりません。武將の意地を貫くため、勝敗を度外視したこんどの意気の旺んさを想わせられませ」

「ふふん」と、信康は笑った。

「すると、おれは父上に意気が劣るように聞えるの」

親吉はまた黙っていた。若きは単純さに通ずる。時々信康が自分の器量を父と比較しようとするのを、親吉は苦々しく思っていた。

（この空気はいつから生れたのであろうか）

母の築山殿と会うたびに、そうした言葉がしげくなる。

親吉が黙っているので信康は舌打した。

「そちは、父上のことを申すと口をつぐむな。よい、もう言うまい。が、これだけは申さねばならぬぞ。わが武術の父上に劣るところだけはの」

「心得てござりまする」

「では今日から五十射する」

的場へついて弓を受取ると、

「暑い……」信康はいきなり寒風の中へ片肩ぬいで的を睨んだ。

毎日の鍛錬で筋骨は隆々として来ていたし、若い肌はたしかに汗ばんでいた。が、家康は決してこうしたことをしなかったが……と、親吉は思う。しかし、それを諫止したものかどうかとなるとこれも迷わざるを得なかった。

父より勇ましきと言われようとしている時に、

「——お父上さまはそのようなことはなされませんでした」

そう言ったら一層父と競う心を増すであらう。

やがて信康は、弦音高く矢を射だした。これまでは三十射、それが五十射をすばらしい闘志で射ちつづけてゆくのである。しかもその矢は殆んど的の中央に立った。

「お見事！」と言いながら、どこかに残心の不足が想われ、親吉の心はチクリと小さな痛みを覚えた。

二

（お館がすぐれすぎていたからであらうか？）

平岩親吉は、そう考えて自分を恥じた。信康が自分と父を比較するのを苦々しく思うあとから、親吉もまた信康と家康を比較しているのである。

信康につけられている身であれば、信康の育ちのよしあしはそのまま自分の責任でなければならなかった。

「お見事でござりました。さ、肩をお入れなされませ。風邪を召してはなりません」

「ハハ……」と、信康は豪快に笑った。

「この位で風邪をひく……そのような体で何が出来る。父上は尾張にあった頃、寒中よく岐阜のお館と泳がれたと申すではないか」

信康はまた父の名を口にして、それでも素直に肌を入れた。

「さ、戻って雑煮を祝おう。そちも膳を共にせよ」

「ありがたき仕合せながら、その儀は前例なきことなればお断り申し上げます」

「なに、そちと共に雑煮を祝う……それは些かも悪いことではあるまい。よい前例ならばおれが作っても苦情言う者はない。遠慮いたすな」

「遠慮ではござりませぬ。三カ日の祝膳は、ご夫婦そろって遊ばされるよう、それが毎年の例でござりまする」

「ハッハッハッハ……」

寒風の中を昂然として歩きながら信康はまた吹きとばすように笑った。刀術も馬術、槍術、弓術もみな父をしのぐほどに強くなった。が、その体中にあふれた豪気には、何となく銜いの色が感じられる。

「年寄の考えは窮屈で堅いことじゃ。おれはの、ものの善意を見きわめて、これが善と信じた時にはびしびしと改革する。そこに新しい歩みがあると気がつかぬか。澁んだ水はすぐに腐るぞ」

城内へ帰って来ると、ここでも大広間へは武装の将士が続々とつめかけだしていた。本丸の奥で徳姫と二人祝膳について、それから現われて来る信康を待ためたのだ。

信康は親吉に附添われたままそのわきを奥へ通った。あわたましい正月だったが、方々に丹念にしめ飾りがしてゐるのは久松佐渡の律義な指図によるものだった。

「爺がまた細かく飾つたものよのう」

信康は苦笑をうかべて、徳姫の待つ居間の廊下を通りすぎようとする。

「若君！」

「なんだ親吉」

「祝膳の間はここでござりましようが」

「ああその前におれは下着を替えて来るのだ。汗が出ています」

信康はそう言い捨てて、新しく部屋を与えられたあやめの居間へ入っていった。

「若君！」と、また親吉が呼びとめたが、若い大将は見向きもしない。

「あやめ、下着を持て」と、中でおおらかな声が聞えた。

「おれはそなたの手で汗を拭かせようと思うての、わざわざ顔を出したのだ嬉しかろう」

「はい。まあぐっしり汗が」

「さ、拭ってくれ。そして、そなたも今日は祝膳に並んでつけ。何……徳姫にはばかりがあると。ハハハ……そのような姫ではない。おれが許すのだ。誰に遠慮がいるものか」

親吉は次の間に坐ったまま、妻妾共に祝膳につかせる気の若い大将をどう諫めようかとハラハラした。

三

中ではこれも男の情を知ったばかりのあやめが、全身を熱くして汗を拭いたり着物を着せかけたりしているらしい。

「どうだ逞しい腕であろう」

「はい……」

「触ってみよ、爪も立つまい。が、おぬしの腕はまた何という柔かさだ」

「あ、ごめん遊ばしませ。腕が折れまする」

「ハハハ……そうしてしかめた眉がいちばん愛しいわい。」

「いっそ折ってつかわそうか」

「ごめん遊ばしませ。あ……」

たまりかねて次の間から、

「若君！」と親吉は叱る声になっていた。

「年寄は、そんなところに居たのか。すぐに参るぞ。さ、

あやめ、そなたも参れ」

「若君！ それはなりませんぬ」

「なに、何がならぬのじゃ」

「あやめのお方のご同席は相成りませぬ」

「これはおかしな事を申す……おれが許すのにそちが成らぬとは……また前例か、堅苦しい年寄じゃ」

「いいえ、前例の有無にかかわらず、ものにははじめが大切、今日の祝膳には誰も同席は相成りませぬ」

あやめはあわてて信康に取られた手を離し、

「私はご遠慮申しまする」

と、小さくなった。

信康は舌打した。

「親吉！」

「はい」

「昔から妻妾が争うと奥はみだれると聞いている。おれはそのような事のないよう、二人をよく親しませておこうと思う。おれの考えに誤りがあると言うのか」

「恐れながら、それは突飛に過ぎます。ご夫婦とはそのようなものではござりませぬ」

「ではどのようなものだというのだ。聞こう親吉」

そういうと信康は爛々と眼を光らして親吉に詰め寄った。

親吉は情無かった。このような逸脱こそ奥のみだれの因になると分っていないながら、それを分らせる弁舌が彼にはなかった。

「なぜ黙っているのだ。二人が親しんでなぜ悪いのだ。どちらもおれの想い者、二人ならべて膳を祝って悪いわれが呑み込めぬ。呑みこめぬことには従わないのが、おれの

性分だ」

「恐れながら……」

親吉は額にじむ汗をおさえて、

「世の中には身分、順序というのがござりまする。奥方さまは岐阜のお館の一の娘、あやめの方は名もない町医の……」

「黙れッ」

信康はげしい一喝とともにトンと畳を蹴りつけた。

「そのようなこと、改めてそちに聞かせられねばならぬほど愚かなおれと思っているのか。誰が姫の上座にあやめを据えよと申した。ただ仲ようさせるために、同席許すと申した意味がわからぬのかッ」

「分りました。天晴れじゃ三郎どの」

親吉は自分の後に思いがけない築山殿の声を聞いて思わずぎゅっと唇をかみしめた。

「平岩どの、三郎に奥の順序を説くは少しばかり僭越のようじゃの。父上を見られるがよい。今川治部大輔の姪のわらわをしりぞけて、名もない者の小娘にうつつをぬかず。それに比べて正室、側室の和をねがう三郎どの……天晴れじゃ。三郎どのあやめの同席、この母も許しまする」

親吉は唇をかねて黙っていた。

四

「お控えなされませ」

そう言って、築山御前をたしなめて差支えない平岩親吉の立場であったが、彼の温厚さと思慮とがそれを許さなかった。もしたしなめたら御前は狂乱したように嘆きだすに違ひなく、親吉もまた責任上一歩もひけなくなるからだった。

（情無い！）と親吉は思う。

家康と築山御前の不和——それだけがこの城に暗い陰をおとしてゐる。その陰をこれ以上深めたくないと思えば、沈黙するより他になかった。

「平岩どの」

築山御前は一層皮肉な嘲笑をふくめて、

「正室と妾の同席はならぬというそこ許が正しいか、正室などは顧みずに妾だけを近づけるお方が正しいか、そこ許から浜松の殿のもとへ伺うて見るがよい。さ、あやめ、三郎どのが許すと仰せられる。お供してゆくがよい」

一座は一瞬白け渡って、いわれたあやめまでが消え入りそうに震えている。と、それまでじっとみんなを見回していた信康は、

「なるほど、これはおれが悪かった。親吉、許せ」と、思いがけないことをいった。

「あやめを同席させると言ったのは、おれの我儘であった」

「えっ!?」親吉はわが耳を疑って、

「何と仰せられましたか?」

「同席はさせぬ。許せ親吉……なるほど父上は浜松で、お一人で祝膳につかれていたのだった」

それを聞くと、親吉の眼が急にすーっと赤くなった。

「では、お聞き入れ下さりまするか」

「おう、母上のおわさぬ城に、おひとりであられるを忘れて、おれだけ賑わしゅう三人でと考えたは我儘であつた」

「三郎どの!」

築山御前の声が突き刺すようにあとを奪つた。

「こなた様は、お父上が浜松に一人でおわすと思つてか」

「母上がおわさぬと申したまで」

「何の! わらわがあらぬを幸い、お万のほかに近ごろはお愛と申す女子までお近づくと聞いている。そのようなお父上に何で遠慮がいりましょう。あやめをお連れなさるがよい」

「母上!」

信康の眉はきりりとあがつた。精悍な頬に美を追う若者の怒りを見せて、

「母上はこの信康をこけになさるお気か。信康はわが身のこととはわが身で分別いたします。親吉、参れ」

はつきりと言いきって、そのまま徳姫の待つ居間の方へ

歩み去つた。

このはげしさもまた、家康にはないものだった。

「ご免なされませ」

親吉が信康のうしろに続いて去ってゆくと、築山御前はしばらく凍りついたように廊下へ立って虚空を睨んでいた。

空はからりと晴れていたが風は強い。屋根の上で鳴る松がごうごうと御前の胸の絶望をあおっていた。

「あやめ!」と御前の怒りは、そこにうずくまっている少女の上に転じられた。

「こなたはそれで女子なのか。わが殿御を……あのようにして連れ去られて、それで、そなたは口惜しゅうないのか」
あやめは一層小さく畳に伏して震えている。

五

「そなたは、誰のおかげで三郎どののお側にあがつたのか忘れはすまい」

「は……はい。お許し下さいませ」

築山御前の血をふくんだまなじりを見ると、あやめは息が出なくなりそうだった。

「ここでは話も出来ぬ。入って来や!」

御前はつかつかとあやめの部屋に通って、自分でも立っ

ていられない様子でべたんと坐った。

「頼み甲斐のない娘……」

「はい……はい」

「この瀬名は、そなたの蔭で怨みをはらすとゆうたであらう」

「お許しなされて下さりませ」

「織田の姫は、わらわにとつては今川館の仇敵、その仇敵にわが子の肌は触れさせとうないと泣いてあかしたわらわの言葉をお忘れか」

あやめはワーツと声を立てて泣き伏した。

あやめにとつて今全身で縋れる者は信康ひとり。と、いつてこの少女に、甲斐と三河の複雑きわまる謀略の手や、築山殿の怨恨まで分ろうはずはなかった。

あやめはただ継母の憎悪をのがれるために滅敬に連れられ甲斐を發つて来たのである。そして甲府生れとゆうてはならぬと命じられるままにそれを隠して信康のもとへ奉公にあがつたのだ。

その奉公が女の体で仕える奉公と聞かされても、この不幸な娘には、さしたる感情のうごきはなかった。

（憎悪のない世に住われたら……）

それだけの小さな希いで信康に愛されて、はじめてそこに別の喜びを見出した。

同じ年の信康の愛情は、彼女の心をまるで春の野の陽炎のように眩しいもので包んでいった。

そして慎ましくその幸福をまもらうとしている時に思いがけない形相で築山御前に詰寄られてしまったのだ。

誰のおかげで信康のお側に上ったのかと問い詰められると、それはたしかに御前のおかげに違いなかった。が、その御前が徳姫を憎みきっていたと洩らした言葉はわが仕合せに落けこんで忘れかけていたのである。

「泣くまい。他人に聞かれたら何とするのじゃ」

「はい」

「こなたが、三郎どのをひとり占めして、男の子を産みやつたら、そなたはこの城の主のお袋さまじゃと、あれほどくどく聞かせてある。なぜ、こなたは、さっき三郎どのに縋らぬのじゃ。器量も氣だてもこなたの方が優っている。こなたが縋って行きさえすれば三郎どのはこなたのもの。こなたより先に織田の孫が生れたら、こなたは一生日蔭者におちるのじゃ」

「はい……きつと……産むように努めまする」

「ほんに頼み甲斐のない娘……」

そこでまた御前は自分の怨みと孤独に感情がそれたらしく、あやしい眼をしてじつと虚空を睨みだした。

「わらわはの、ああして、家臣からも殿からも憎まれきつ

ているのじゃぞえ。この上わが胎を痛めた三郎どのにまで憎まれたら、それこそ生きるも詮ない身。わらわの身を哀れと思うなら……のう、あやめ、三郎どのだけしっかりそなたの腕の中にしばってたもれ」

そういうと、こんどは御前がさめざめと泣きだした。

六

あやめは狂ったように泣きつづける築山御前に慰めていいのか詫びていいのかわからなかった。

いかに打ちひしがれた少女とは言え、信康をひとり占めしたい女の感情はどこかにあった。が、正室の徳姫は、織田信長という甲府の御館さまにも匹敵する御大将の一の姫……そう聞かされるだけで、女の感情よりも怖えの方が先に立った。

信康の機嫌はそこねても、あとで取返しがつきそうに思えたが、徳姫の感情を損ねたらそれで自分の憩いの巢は粉粉になりそうな予感がある。

その怖えがついあやめを控え目にしてゆくのだが、築山殿はそれが堪らなく齒痒ゆいらしかった。しばらく身をもんで泣いたあとで、築山御前はすーっと立った。

「あやめ」

「は……はい」

「よいか。しかとそなたに命じまするぞ。三郎どのが戻られたら、姫のお側に行くほどならば、このあやめに暇を下されと言いなされ。いや、ただ言うだけではならぬ。事実暇を取ってわらわのもとへ戻るがよい。そなたが、それだけの力もない女子ならば、三郎どののお側においても無駄なことじゃ」

あやめはぐさりと心臓を刺された気がして答えも口へ出なかった。

「よいか。しかと申渡しましたぞ」

築山御前はそういうと、裾を鳴らして急ぎ足に去ってゆく。

あやめはしばらくひれ伏したままだった。信康を姫のそばへやるなどという意味よりも、暇をとって戻って来い——そう言われた言葉の方が、悲しく強く胸をうつ。

(まだ安心して住める巢は、あやめの上に作られてはいなかった……)

そう思うあとから、はじめて知った信康への思慕が、せせぐるように感傷を衝いて来る。

(不幸な子……)

(可哀そうな巢のない小鳥……)

その小鳥は、やがて居間の窓下にしょんぼりと坐り込んだ。涙ぐんだまま、あやめといういいじらしい娘の、淋しく